

解 説

動 作 の 性 差

森 下 はるみ*

1. 性差を規定するもの—ズボンとスカート—

トム・ソーヤーの親友ハックルベリイ・フィン少年が、たちまちのうちに女装をみやぶられたのは、世知にたけた慧眼女史の“論拠”をそのままかりれば次のようになる。

その1: “ねえ、お前さん、針に糸をとおすときには、糸をじっと持って針のほうを近づけるんじゃないよ。針をじっと持って、糸を突っこむんだよ。それが普通、女のやり方だ”

その2: “ものを投げつけるときは爪さき立ってぐいと伸び上がり、できるだけきちない恰好で手を頭の上まで上げて、鼠から六、七フィート離れたところへ狙いを外すのだよ。肩に回転軸でもあるかのように、肩のところから腕をぎくしゃくさせて投げるのだよ。女の子らしくね。男の子のように腕を片側に突き出して、手首と肘で投げるんじゃないよ”

その3: “女の子がなにかを膝で受けるときには、膝をひらくものだよ。お前さんが鉛の塊を受けとめたときのように、両膝ではさんだりしないんだよ” (マーク・トゥエイン: ハックルベリイ・フィンの冒険 村岡花子訳、1959、新潮文庫)。

“男なら騙されるかもしれないが、女の子の振りはかなり下手だね”といいながら指摘されたたった三つの「身振り」にも、日常的な「動作の性差」が、なぜ、どのようにできてくるかをしめす鍵が含まれている。たとえば、「その1」は社会的な性役割の差異に、「その2」は体力・運動能

力の差異に、「その3」は、男性のズボンに対する女性のスカートといった衣服のちがいにそれぞれ起因し、その上に、日々の強化と学習が積み重なって、いわゆる“男の動作”とか“女らしいしぐさ”といった「型」が分化してゆくといえる。

このうち「その3」は、衣服によってもたらされた二次的、三次的な「動作の性差」で、lapつまり膝をおおうスカートの上に生じる「空間」意識の有無が、フィン少年の正体をばらしたのであった。

“私たち女性をよくlapをもつが、男性はあまりもたないのではないか”⁶⁾

というイギリス女性の言葉がまさにこれにあたる。実際、人々の身体意識には、衣服をはじめ履物やかぶりもの、あるいは家具調度類を包含したものが多し。たとえば欧米女性のスカートをつまんだお辞儀、着物の裾さばきから生じた「うちまた」、日舞の「かいぐり」の原型と思われる動作で袖口に片手をそえて、一方の手で物をさしだす所作などもその一例である。

とくに儀式や舞踊で演じられる様式化された動作には、衣裳の表現効果を計算にいれたものがおおい。日本の舞踊の「すりあし」や「うちまた」は(写真1)、幅せまい衣裳であしの動きが抑制されたことと無縁でないし、東欧の民族舞踊にみられる上体を垂直にのばした男性の姿勢には、軍隊ファッションや騎馬姿勢の影響が見られる。ただし、イスラム教メヴレヴィ教団の(男性)托鉢僧が祭儀のクライマックスに演じるめまぐるしい回転は、あのギャザーの多い白いスカートなくては考えられない。ともあれ衣服の性差がはっきり枠づけされた文化ほど、「動作の性差」もまた明確な枠づけを持つといえる。

平成元年 5 月 26 日 受付

*お茶の水女子大学

〒112 文京区大塚 2-1-1

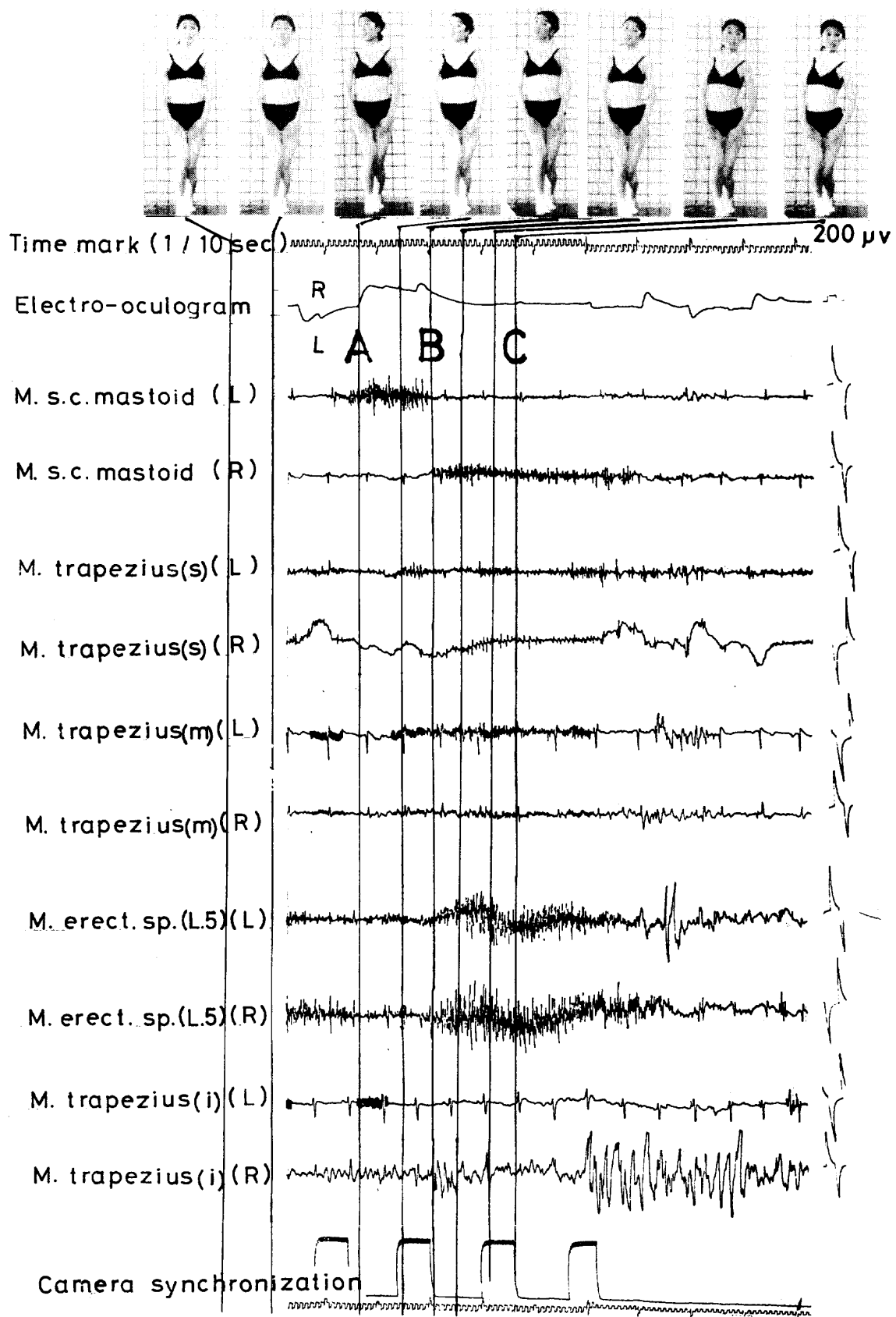


写真1 地歌舞の“三つ振り”(右をみる“きまり”の動作)。
subj, 神崎ひで女。

2. 男児と女児の動作

フィン少年の「女振り」のうち、生物学的性差とかかわりの深いのは、「その2」の鼠に鉛の塊を“なげつける”動作である。体力・運動能力の発達をみると、幼児期から走・跳・投など筋力やパワー系の能力は男児が優位をしめ、一方、まりつきやスキップなどリズム調整や静的平衡能を必要とする能力は女児が優位をしめす。⁸⁾ なかでも「投」は女児のもっとも不得手な技で、その稚拙なぎこちなさが、上記の婦人の目をかりて的確に動作分析されている。

ところで、幼いサルでは、雄がより活発で攻撃的でむこうみずな遊びをこのむのにたいし、雌は静的で友好的で母親ごっこのような遊びをこのむことが観察されている(ハーローら)。Goldbergらによると、⁵⁾ ヒトの場合も、三か月児の玩具選択では、女児がブロックやぬいぐるみなどの“静的な遊び”にむいたものを選び、一方、男児は、大きな音をだす物をより多く選び、活発に動きまわるといふ。

Smith, P. K らは幼稚園児の自由遊びにあらわれた動作を観察し、男児では run, jump, wrestle, fall over, さらに声を出した笑いや「ブーブー」「バーン」などの play noise の出現頻度が女児より高く、“活発な、道具を使わない、接触型遊び”を好む傾向があると報告している。一方、女児では“玩具を使った、静的な、非接触型の遊び”を好み、give, show, talk といった友人や先生との相互作用にともなう動作が多く表れる。この傾向は年齢とともにまし、女児は「達成」に対し、男児とくらべ、先生からの「賞賛を求める」傾向があるという。²⁾

また、ゴールドバーグによると、室内で一才児が母親と金網でしぎられた場合、女児はつつ立って泣いているだけだが、男児は泣くのをやめて隙間から出ようと試みる。幼少期の言語発達は女児のほうがはやいことはよく知られているが、女児が、一般に大人との言語的な意思疎通によって問題を解決しようとするのにたいし、男児は事物や環境に直接身体でぶつかり、体験領域を拡大してゆく。この違いが、思春期以後になって、女児が

感情的共感的な側面を発達させてゆくのにたいし、男児が論理的概念的側面をつよめてゆく根拠になるのではないかとのべている(服部百合子:「性差」参照)。乳児期の行動にみられる性差は、比較的生得性が高いと見なしうる。しかし、“大人は子どもが生まれたその日から、男児と女児にたいして異なった態度をとり、異なった期待をする”¹⁵⁾ といった親子の相互作用にかんする数々の観察事例は、誕生直後から、生得的性差をよりおし広げるようなベクトルの設定が準備されていることを示唆するものである。

幼児の「指しゃぶり」は女児により多いが、ホンジラクらはこれを女児の皮膚感覚がより鋭敏なこととむすびつけている。また、ザッツは7-12才の子どもに映画を見せ、興奮してくると、男児は身体をより伸展させ、女児ではより縮小させる傾向があるとし、これを覚睡水準の性差にむすびつけている。しかし、動作の性差を生理的、器質的特徴と結びつける試みはまだ十分に成果をあげていない。

3. 日常動作の性差—休息姿勢

実験者と話をするときの姿勢について、エンゲルは3-15才の子どもを観察し、男児は膝をのばしたり、前かがみになったりのリラックスした姿勢が多く、一方、女児は、より硬い姿勢で身振りも少なく、相手に同意できないときは、さらに硬直の度合いが増すと述べている。

この傾向は大人にもあてはまる。たとえば G. Hews は古今東西の休息姿勢を分類し、性差を含む地域差を比べ、Marianns Wex は2000あまりの写真を集集しヨーロッパ人の休息姿勢について性差をみている(写真2)⁷⁾。それによると、全般に、



写真2 ヨーロッパ人の椅座姿勢 (Marianne Wex)

男性は四肢を身体から遠心的に保つ傾向が、一方、女性に求心的に保つ傾向がある。また女性にくらべ男性はよりリラックスした座り方で、占める空間もおおきい。また Hews によると、あぐらのように脚を組む座り方は、おもに男性の姿勢として、床座を習慣とする日本・南アジア・アメリカインディアンなどひろい地域でみられるが、スカートをはく地域では女性はおこなわない。また、両脚を前にのばすいわゆる長座は、アフリカ・アメリカインディアンなどでは、女性の姿勢だという。

Birdwhistell, R.L.¹⁾ は、身体つきの性分化の少ない動物では、生殖器や動作でその誇示をしばしばおこなう必要があり、人における男らしさ“masculine”や女らしさ“feminine”の誇示も生得的・本能的にくみこまれた機能にもとづくものだとして述べている。男の休息姿勢にみられる四肢の外転・外旋度の大きさは、“男らしさ”“優位性”の誇示と共通するところがある。一方、女性の姿勢は四肢の開きも小さく、膝や肘は正中線ちかくに位置し、頭を傾ける、両あしを横になげだす(横すわり)などアシンメトリーが多い。これらの特徴は、動物における劣位の個体や幼児の姿勢、あるいは、相手の攻撃性を抑制したりなだめたりする際の姿勢と共通するものである。このなだめの機能は、“あいさつ”行動の際、お辞儀や帽子をとるなどいずれも自分を小さくみせる動作がもたらす効果と共通する。

4. 日常のみぶりの性差と文化差

“…さよならも いえずに だまって うつむいていた おさががみ……”

という流行歌があった。このように、だまってはじらいや悲しみをこらえている姿は、“女らしさ”

の一つの典型として、日本人、ことに男性に好まれてきた女性のしぐさであった。しかし、“英米社会では、人前で顔を伏せる事は、一般に、相手が自分に下す評価にたえられない不安定な気持ちのあらわれ…、自己を確立していない証拠…、人間的に未熟なためと判断される”⁶⁾ ようだ。

[写真3]にみられる、手や持ち物で顔をかくしたり、口もとをおさえたりする displacement grooming action も、日本では慎み深さや女らしさとみなされるが、英米では隠しだてのないかぎり、口もとを人目に解放しておくのが礼儀だとされているという。Ramsey, S. J. は、¹³⁾ 口もとをおさえた、若い日本女性の数種類の写真を日米両方の判定者にみせて比較研究をしている。そして、日本ではこの動作の容認性が高いが、アメリカの判定者では、childish, foolish などの得点が高かったと述べている。また娘十八のころの「箸がころけてもおかしい」笑いや、「もじもじ」「の字かき」のようなはにかみ動作も、一人前の女性には容認されていない。

はにかみや情動にともなう、おもわず顔をふせたり、手でおおったりする動作は、Eibl-Eibesfeldt^{3,4)}によると、世界各地に普遍的にみられ、生得的にプログラムされたものだという。この動作は、外界と自己を遮断(cut off)し、それによって内なる自分を隠し、同時に外の刺激をさけるという一種の自己防衛的機能とむすびついている。英米では成長にともなう、このような動作の表出が抑制されていくのにたいし、日本では、一方の性、つまり女性にのみ容認され、ときには舞踊や芝居で演じられているような誇張と様式化がなされてきた。つまり、“女らしい動作”とわれわれが読みとるものには、他の文化圏で childish とうけとめられる要素がかなりおおい。そして、こ

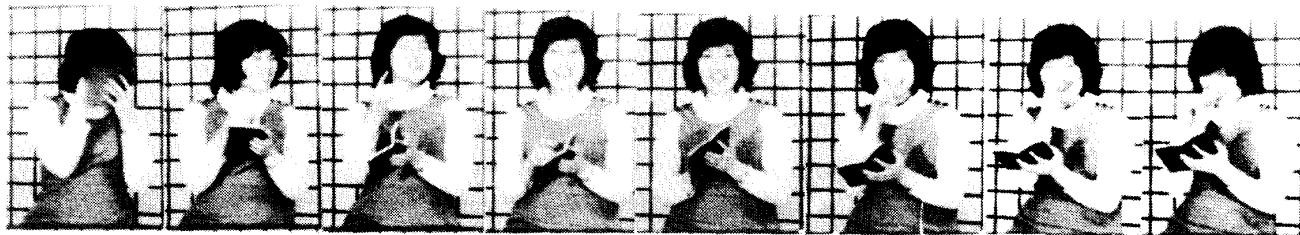


写真3 若い女性の“顔かくし”“口かくし”(cut-off)動作,

のあたりに娘から“sexy”な時期を一気にとびこえて、母親になってしまうという、これまでの日本女性のライフサイクルが反映している。森下によると、歌舞伎役者の喜怒哀楽の表情の日独比較では、“わらい”の読みとりには差異が大きい。³⁾つまり、“……らしい”という読みとりは、“うまそうだ”とか“美しい”と同様に、見る側の解釈にもとづくもので、その前提として、演技手と読み手のあいだに文化的な共通体験がなければならない。また、cut-offのような生得性のたかい動作においても、その容認度には文化による選択の差異がある。

5. おどり・芝居における動作の性差

おどりや芝居においては、「アクロバティックな動作」だけでなく、歩いたり、物をはこんだりといった「日常動作」、喜怒哀楽にともなう「表出動作」がそれぞれ様式化されて演じられている。このうち「アクロバティックな動作」の場合は、体力に対応してテクニクの性分化がみられる。たとえば、バレエの主役の男女がクライマックスで踊るソロの回転も、トゥール・ア・ラ・スゴンドのような筋力のいる力強いものは男性が、しなやかな巧みをみせるフェテ・アン・トゥール・ナンのようなものは女性が踊る。

「日常動作」や「表出動作」を舞台上で演じるときは、日常生活における普通の動作、つまり「原型」についての誇張や抑制がなされ、それが伝統芸能の場合は一定の様式をもった「型」になってくる。たとえば、跳躍はよろこびで欣喜雀躍するさま、ぐっと身体をそらせる“海老返り”は驚愕のさま、歌舞伎のひっこみになされる“六法”や“丹前”はあらあらしい足取りの誇張であり、ぎゃくに、能の“しおり”や“足拍子”は、悲嘆や怒りを抑制的に表現したものである。

“男の型”“女の型”についても、その「原型」は日常動作のなかにある。Birdwhistell は、男女の誇示的な動作について、両脚を10-15度の角度で開く(男)：両脚をそろえる(女)、上腕を体幹から5-10度はなす：くっつける、腕が胴体と分節して動く：頭から足まで全身が随伴して動く、骨

盤を前傾させた姿勢：後傾させた姿勢といった特徴をあげている。¹⁾

また西田は、¹⁴⁾絵画や彫刻にあらわれた男性像と女性像について、体幹の正中・伸展位：側屈・回旋位、大胸筋の強調：乳房の強調、肩幅の強調：腰幅の強調、肩・肘を横にはりだす：身体にくっつける、握り拳：手指の過伸展などの特徴をあげている。

[動作]の場合は、上にのべた空間的特性に時間的特性が加わってくる。たとえば、性差はめりはりのあるなし、急速度にたいする緩速度、主動作の強調にたいする予備動作や随伴動作の強調、強さにたいするかるやかさの強調などでしめされる。¹¹⁾

女の動作特性である主動作にたいする予備動作や随伴動作の強調の例は、写真1の“三つ振り”にも表れている。ここでは左をみるまえに、目だけ逆方向(右)にむける—頭部を逆方向(右)に振る—頭頂と目を左に顎を右に振る—体重を右足にうつしかえながら顔面を正面に目を左にむけるなどが順をおってなされている。地歌舞はとくにその緩速・等速性と運動域の抑制がいちじらしい「女舞」であるが、わずか45度頭部をまわすのに5秒以上かけ、くびと背面の筋群が時間差収縮をするのがわかる。

これまでのべたのは、「動作の性差」のうち、一方の「性」に、より頻度たかくあらわれるものである。しかし、生身の男女には、「性」だけでなく年齢・民族性・職業・地位・性格などに応じた百人百様のすがたと動きがある。たとえば、バレエ「白鳥の湖」のオデット(白鳥)とオディール(黒鳥)を比べても、前者の場合は、ふせた目、傾けた頭部、身体の前で交差する内転した腕、手首の背屈、手を胸のあたり交差させるなどの自己接触(self manipulation)、デュエットのさいのパートナーへのもたれかかり、緩速度、曲線の強調といった特徴がみられる。一方、オディールの場合は、頭部と上体は垂直位で視線も高く、めりはりと速度感のあるアクロバティックな技巧を誇示して、エロチシズムと加虐性をふくんだ魅力を表現している(写真4)。

体軸のカーブや非対象性、あるいは各部の動き



写真4 「白鳥」と「黒鳥」

(American Ballet Theater Da CAPO, Press (1982))

の時間差といった“女の動作”特性には、拒否と肯定といった一種のアンビバレンツな感情が反映している。これを逃げては誘うことで、求愛期のオスの興奮レベルをたかめる生物的功能とむすびつける人もいる。

もっとも関節における運動域の狭さ、位置移動のすくなさ、動作の単調さ、緩速度といった特徴は、日本の伝統的舞踊に広く見られるものである。“心を十分に働かせ、動きを七分にとめる”(花鏡)という動作の抑制的美意識がそこにはある。また、抑制の部分にこめられた暗喩をよみとることが、演じ手と読み手の相補的交流となって感興をたかめる。“黙っている”“面をふせる”など英米では否定的な動作が、日本では女らしいとよみとられることはすでにのべた。そこには従来、女がおかれた地位や役割の劣位性をしめす行為が、そのまま、女らしい動作として条件づけられた部分がかかなり多い。一方、墨絵における空白に無限の広がりを読み取ったり、抑制された動きに心のはげしさをみるといった語られぬ余情への日本的志向性も、“……らしさ”の解釈に大きく反映しているのではなかろうか。

参 考 文 献

- 1) Birdwhistell, R.L.: Kinesics and Context, Phila. Univ. of Pennsylvania Press, (1970)
- 2) Blurton Jones, N.: Ethological Studies of Child Behaviour, Cambridge Univ. Press (1972)
- 3) Eibl-Eibesfeldt, I.: Die Biologie Des Menschlichen Verhaltens, Piper, 199-206 (1986)
- 4) I. アイブル=アイベスフェルト: プログラムされた人間, 霜山・岩淵訳, 平凡社 (1977)
- 5) Goldberg, S. & Levis, M.: Play Behavior in the Year-Old Infant, Early Sex Difference Child Development, 40-21, (1969)
- 6) 小林祐子: 身ぶり言語の日英比較, エレック選書 (1975)
- 7) Marianne Wex. "Weibliche" und "Männliche" Körpersprache als Folge Patriarchalischer Machtverhältnisse, Evalouise Panzner (1979)
- 8) 森下はるみ: 幼児期の運動能力の発達におよぼす内的外的要因の影響, 体育科学, 7, 154-163 (1979)
- 9) 森下はるみ: 舞踊のバイオメカニズム, バイオメカニズム 5, 0-16 (1980)
- 10) 森下はるみ: 男女文化論—芸術世界の男と女の動作, 富田守(編): 人間と文化, 35-58, 垣内出版 (1988)
- 11) 森下はるみ: すがた・動きからみた男らしさ, 女らしさ, 体育の科学, 39 (1), 25-29 (1989)
- 12) 森下はるみ: 踊り・芝居の身ぶり・しぐさ, 技術と経済, 132 (1978)
- 13) Ramsey, S.J.: The Kinesics of Femininity in Japanese Women, (未出版)

- 14) 西田正秋：美術解剖学論攷，彰考書院，(1946)
- 15) F.M. スミス：言語・性・社会，井上・河野・正宗訳，大修館 (1987)
- 16) Smith, P.K. & Connelly, K.: Patterns of Play and Social Interaction in Pre-School Children, N.Blurton Jones (Eds), : Ethological Studies of Child Behavior, 65-95, Cambridge Univ. Press. (1972)

森下 はるみ（もりした はるみ） 昭和38年東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学，立正女子大（現・文教大学）講師・助教授，現在，お茶の水女子大文教育学部舞踊教育学科教授。動作学，動作発達学の研究に従事。日本体育学会，日本人類学会，小児保健学会，体力医学会の会員。